

＜オールウェイズ／ニューヨーク・トリオ＞

2001年に『夜のブルース』でアルバム・デビューしたニューヨーク・トリオは、同作の録音からそろそろ7年になる。気がつけば日本制作の冠ピアノ・トリオとしては、ヨーロッパン・ジャズ・トリオに次ぐ長寿ユニットのポジションを築いていたというわけだ。ニューヨーク・トリオ誕生の経緯に関しては、同デビュー作の解説でも触れられており、ファンならご存知のことだろう。ヴィーナスレコード制作によるビル・チャラップの日本デビュー作『ス・ワンドフル』（98年）は、それまで輸入盤市場で注目を集めていたピアニストが、全国区に人気を広げる起爆剤となったヒット・アルバム。成功の要素は揃っていた。メンバーのピーター・ワシントン(b)&ケニー・ワシントン(ds)は、様々な場面でコンビを組む機会が多く、米国のメディアでは“ワシントンズ”と呼称されるリズム・チーム（姻戚関係は無し）。チャラップの母国での最新作『ライヴ・アット・ザ・ヴィレッジ・ヴァンガード』（Blue Note）でも共演している間柄である。また水上スキーを楽しむ女性をあしらったアルバム・カヴァーがアイ・キャッチャーとして効果的だったことも、アルバム・セールスに寄与したようだ。こうして日本で好調な滑り出しを見せたチャラップは、しかし本国での契約関係から日本制作の個人名義作が難しい状況となってしまった。せっかく日本でも認知されたチャラップの新たな道を、ここで終わらせていいものだろうか。かくして生まれたのがユニット名義のニューヨーク・トリオというわけである。

本アルバム『オールウェイズ』は通算7枚目となる新作。ジェイ・レオンハート(b)+ビル・スチュアート(ds)からなる不動のトリオだ。21世紀の幕開けから、1年に1枚のペースをキープしてきた彼らの、2007年5月ニューヨーク録音。第3弾の『ラヴ・ユー・マッドリィ』で初めてのソングブックとなるデューク・エリントン集を完成させたニューヨーク・トリオは、「スイングジャーナル」の読者リクエストによる『星へのきざはし』をはさんで、コール・ポーター集の第5弾『ビギン・ザ・ビギン』、リチャード・ロジャース集の第6弾『君はすてき』と、このところ特定の作曲家にスポットを当てたアルバム作りに情熱を注いできた。そして今回の新作で取り上げられたのがアーヴィング・バーリンである。

バーリンは1888年ロシアのテムン生まれ。5歳の時に一家でニューヨークへ移住。父親を早くに亡くしたため、少年時代からカフェで歌の仕事をしながら、作詞とピアノを独習。その後ニューヨークの音楽出版業者街ティン・パン・アレイで、お客のために楽譜をピアノで弾いてみせる仕事をこなし、作曲も始めた。1911年に「アレキサンダーズ・ラグタイム・バンド」が大ヒットし、本格的にミュージカル楽曲を手がけるようになる。その後、映画音楽も手がけ、戦前のハリウッドを代表するソングライターとなった。第二次大戦後もビング・クロスビーの記録的なヒット曲『ホワイト・クリスマス』や『ショーほど素敵な商売はない』等々の名曲を世に送ったが、62年に作詞・作曲活動から引退。生涯に書いた歌曲は1000曲を超える。88年には「カーネギー・ホール」でくアーヴィング・バーリン100歳祝賀コンサート>が開催され、フランク・シナトラ、ローズマリー・クルーニー、トニー・ベネット、ナタリー・コールら著名シンガーがバーリンの偉業を称えた。バーリンは89年に101歳で永眠している。

チャラップはヴィーナスでのレコーディングと並行して活動する本国でのアルバム制作においても、ソングブックづいている。ホーギー・カーマイケル集の『スターダスト』、『ウエストサイド物語』の作曲者として知られるレナード・バーンスタインの映画音楽を集めた『サムホエア』、フィル・ウッズ、ニコラス・ペイトンら管楽器奏者が参加した『ブレイズ・ジョージ・ガーシェイ

- | |
|------------------------------------|
| Always |
| オールウェイズ |
| New York Trio |
| ニューヨーク・トリオ |
| 1. オールウェイズ |
| Always（5：15） |
| 2. チーク・トゥ・チーク |
| Cheek To Cheek（5：41） |
| 3. セイ・セイ・イツツ・ワンドフル |
| They Say It's Wonderful（3：57） |
| 4. アイ・ゴット・ザ・サン・イン・ザ・モーニング |
| I Got The Sun In The Morning（5：19） |
| 5. ハウ・ディープ・イズ・ジ・オーシャン |
| How Deep Is The Ocean（3：57） |
| 6. チェンジ・パートナーズ |
| Change Partners（4：43） |
| 7. ホワットル・アイ・ドゥ |
| What'll I Do（5：24） |
| 8. イズント・ジス・ア・ラブリー・デイ |
| Isn't This A Lovely Day?（5：39） |
| 9. ザ・ソング・イズ・エンディッド |
| The Song Is Ended（6：51） |
| 10. ロシアン・ララバイ |
| Russian Lullaby（2：07） |
| ～All Songs by Irving Berlin～ |

ビル・チャラップ Bill Charlap〈piano〉
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart〈bass〉
ビル・スチュアート Bill Stewart〈drums〉

録音：2007年5月30日、31日　クリントン・スタジオ、ニューヨーク

© 2008 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

| |
|---|
| ＊ |
| PRODUCED BY TETSUO HARA & TODD BARKAN |
| RECORDED AT CLINTON STUDIO IN NEW YORK |
| ON MAY 30 & 31, 2007　ENGINEERED BY KATHERINE MILLER |
| MIXED AND MASTERED BY VENUS HYPER MAGNUM SOUND：SHUJI KITAMURA & TETSUO HARA |
| FRONT COVER：(C) H. ARMSTRONG ROBERTS / CORBIS |
| ARTIST PHOTOS：MARY JANE PHOTOGRAPHY |
| DESIGNED BY TAZ |

ン』（以上Blue Note）と、こちらもスタジオ・レコーディングでは記録を更新中だ。それにしても日米を股にかけて、これほどまでにソングブックを量産する理由は何なのだろうか。1つ大胆な仮説を立ててみたい。現在ミュージシャンとして油が乗っていると自覚するチャラップは、子供の頃から聴き親んできた20世紀のアメリカ・ポピュラー音楽界を代表するコンポーザーの名曲たちを、21世紀に入り自身の手によってコンパイルするという壮大なプロジェクトをスタートさせた…。いつゴールを迎えるのかわからないこのシリーズをコンスタントに進めていけば、10年後にはジャズ史上例をみない作品群がそこに生まれているはずである。実際のチャラップのモチベーションは知る由もないが、その気になれば決して不可能ではないだろう。

「オールウェイズ」は1925年のミュージカル『ザ・ココアナッツ』の挿入曲。40年代に映画『クリスマス・ホリデイ』や『打撃王』で使用されて、名曲の仲間入りをした。ピアノ・トリオではデイヴ・ブルーバックやビル・エヴァンスが代表的なヴァージョンだ。チャラップは実母で歌手のサンディ・スチュアートとの共同名義作『Love Is Here To Stay』（Blue Note）にも、この曲を取録。ここではピアノ独奏で始まり、トリオへと進んでドリーミーなサウンドが綴られる。アルバムの11曲目にスロー・ナンバーを持つてくるのは、バラード集でなければ意表を突く感もあるのだが、『夜のブルース』もそうであったことを踏まえると、これはチャラップ一流のアイデアだと思える。「チーク・トゥ・チーク」はバーリンが35年の映画『トップ・ハット』のために作詞・作曲し、主演のフレッド・アステアが歌った。ヴォーカルものではエラ・フィッツジェラルド&レイ・アームストロング、インストではフィル・ウッズが名演

に挙げられる。ニューヨーク・トリオは「天にも上る気持ち」と歌われる原曲通りの明るい雰囲気ですタート。テーマ・ステイトメントでピアノのキーを変化させたのが面白い。これがエンド・テーマのための布石であることを、聴き終わった時に知ることとなる。「ゼイ・セイ・イツツ・ワンドフル」は46年のミュージカル『アニーよ銃をとれ』の挿入曲。ジョン・コルトレーンとの共演作で歌ったクルーナー・スタイルのジョニー・ハートマンが有名だ。ここではコルトレーン&ハートマン・ヴァージョンとはややテンポ設定が異なるが、ピアノのテーマ演奏からはハートマンの歌唱が聴こえてくるかのよう。ハートウォーミングな曲調は、ラストまで続く。「アイ・ゴット・ザ・サン・イン・ザ・モーニング」も『アニー〜』の挿入曲。同作は50年にベティ・ハットン主演で映画化されており、撮影中に途中降板したジュディ・ガーランドの吹き込みも残されている。ニューヨーク・トリオは終始レイド・バックしたムードで演奏。クラブ・ライヴのアフター・アワーズにも似た雰囲気醸し出す。「ハウ・ディープ・イズ・ジ・オーシャン」はフレッド・アステア&ビング・クロスビー主演映画『ブルー・スカイ』の使用曲。マイルス・デイヴィスやビル・エヴァンスのヴァージョンが名高い。ここではベース&ドラムスのデュオで始まり、ピアノが加わってからもテーマ・メロディーを奏でず、そのままアドリブ・パートへと進む構成が斬新だ。ようやくテーマが現れると、結局それはエンド・テーマだったと判明。“正統派”で鳴らしてきたチャラップが、このような冒険に出たことには驚かされる。「チェンジ・パートナーズ」はフレッド・アステア、ジンジャー・ロジャース主演のミュージカル映画『ケアフリー』の挿入曲。オスカー・ピーターソンやジョージ・シアリングの録音があるが、ピアノ・トリオ・ヴァージョンはさほど多くはない。ピアノが愛らしいメロディーを奏で、ブラッシュがスムーズなビートを送り込むサウンドは、この曲を代表する新たなトリオ・ヴァージョンと言っていい仕上が

だ。「ホワットル・アイ・ドゥ」は23年に発表されたナンバー。フランク・シナトラ、リンダ・ロンシュタットら多くの歌手が取り上げ、ピアニストではポール・ブレイやデヴィッド・ハイゼルトインが録音している。ここではピアノ独奏を皮切りに、ベースが主旋律を担い、さらにピアノへとバトン・タッチする構成。心地よい余韻を残す演奏だ。「イズント・ジス・ア・ラヴリー・デイ」は30年代の米ミュージカル映画の最高傑作と評される『トップ・ハット』の挿入曲。エラ・フィッツジェラルド、トニー・ベネット、ジェリー・サザンらヴォーカリストのカヴァーが多数。このような歌ものこそがチャラップの最も得意とする素材であり、ここでもその本領が発揮されている。ピアノの音数を多くしないことによって、小粋で趣味のいいトラックになったのも、やはりチャラップのセンスのなせる技だ。「ザ・ソング・イズ・エンディッド」は27年に発表されたナンバーで、「歌は終わってもメロディーは残る」という歌詞内容から「歌は終わらぬ」の日本語曲名がつけられている。ここでのチャラップは前曲とは逆に饒舌なソロで、歌心を表現。多彩なピアノ・テクニクも聴きどころだ。「ロシアン・ララバイ」は「ハウ・ディープ〜」と同じく46年の映画『ブルー・スカイ』の挿入曲。ピアノではエロール・ガーナーやケニー・ドリュエのレコーディングがある。このラスト・ナンバーをトリオではなく、ソロ・ピアノで演じたのは何故なのか。2分ほどの短い演奏時間であることと合わせて考えると、実際のレコーディング時にも、セッションの締めくりとしてこの曲を弾いたことが想像できるのだが、どうだろう。

2007.12.16　杉田宏樹